
アメジスト

しらせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アメジスト

【ΖΖコード】

Ζ4Ζ10Ζ

【作者名】

じりせ

【あらすじ】

樂して生きることがすべてなアメジは100年の時を越えて巨大破壊生物「黒水晶」と戦う。異世界少女アクション。チベット密教文化からインスピレーションを得た世界観。サイト掲載作品を手直しつつのHPです。2006/02/18完結済。全70話。

第1話

「おのれーおのれモンドめーー。大地の底から呪つてやるーー
つ。」

冷たい石の棺の中、少女はうなり声を上げていた。

なぜ、自分はここにいるのか、考える余裕すらなかった。

怒りにまかせて、自分の最期を実にくだらない理由で決めてしまった。

「あたしと結婚するつて約束したじやん。ガキの口ばかり、ずっと
前から交わした約束をつ」

少女が怒っているのは失恋？　いや、少し違う…。

「やぶるかー？その口ひつ、自分が族長になる、その口ひつ。族長
の妻の座つ、あたしの夢つ！」

夢、自分の夢を無にしてされた事に対する怒りと…

「あんな大勢の前でだつ、あたしゃ、ちょーはしゃいで、とんだ赤
つ恥だつての。よつによつて、同じ巫女のシルバと、あんな地味な
女と…」

プライド、プライドを傷つけられた事に対する怒り。

なぜ彼女はこんな棺の中にいるのか、だ。
それは、彼女の夢が破れた直後の事…。

「アメジよ、水晶の聖乙女、やつてみる気はないか?」

白い髪を肩まで伸ばした初老の男は少女に問いかけた。

アメジと呼ばれた少女は、大地に寝転がつたまま、答えた。

「トパーーズ様。なに? それ。あたし面倒臭い修行ヤだからね」「ふてぶてしく答える少女、しかしこいつもの事なのだろうか、そのトパーーズと呼ばれた男は態度を変えず、続けた。

「水晶の聖乙女は大地の底から、このリスタルの民と大地の為に、ただ祈り続ける。

これはアメジ、巫女としてろくに修行をしておらんお前でも、立派にこなせる役目だぞ。どうだ?」

「それって、確かに生き埋めになるつてやつじやない? ジョーダン! あたしには夢があるの、そんなくだらない事、やるわけないじやん。」

「そうだな…。ま、無理にとは言わん。だが私も大神官として、お前を巫女として育てねばならん。それにお前の父にお前を一人前に育てあげると約束したからな。」

「オヤジのことはいいじやん。勝手に遺跡の研究とかで、山の遺跡で死んじゃった奴の事は。」

アメジの父はどうやら放任主義だったようだ。自分の意思を縛られるのが嫌で、趣味であり、生きがいであった古代の遺跡やら、このリストアル独自の特殊なチカラ、この地の民は「水晶」と呼ぶそれを研究していた。

それは生あるモノの中にある氣の流れ、人間をはじめ、この世の生

物はこの大地から、流れてくる気によつて、エネルギーを得ている、といつ。中国でいう氣孔のようなものだらうか、そのチカラを水晶と呼ぶのだと。

「お前はほんとにオルドに似てゐる。いいとこも、悪いとこも。「げつ、やめてよ、トパーズ様つ。あんなのと似てるなんてーつ、嘘でも言わんといでーつ。」

「ハハハ。」

「そろそろ広場まで行かないと。ほら、今日はモンドのつ。」

「ああ、そうか。あやつもついに族長に就くのか、お前以上に心配な奴だからな。」

「だから、トパーズ様がしつかりサポートしてやつてよ。あたしだつて楽できるしー。」

「ん、アメジ、どういう事だ?」

ここリスタルは、北は山脈、南は草木も無い砂漠に囲まれた、山岳地帯にある集落である。厳しい環境の為か、外からも内からも人や生物の移動は無く、陸の孤島と化していた。

唯一の集落、リスタルの民が住むこの街の中心にある広場に、アメジは走つていった。

今日はあるイベントが開かれる。モンドの族長就任の式だ。

モンドは族長の息子であり、アメジとは従兄妹であつた。モンドはアメジに負けず劣らずの、ダメ人間だつた。

アメジと交わした結婚の約束も、族長になれば、周りが世話をやしてくれると思い込み、お互い樂したいがための約束だつた。

アメジは息を切らしながら、広場の人の波をかきわけながら、台の上で挨拶を始めるモンドへと近づいていった。

「モンドっ。」と、小さくアピールするが、彼の視線はまったく別のほうへ向けられていた。

「みんなー、あと今日は、オレの花嫁となる人も紹介するー。」台の上でだらしなく揺れながら、へらへらとテしながら、彼はその花嫁の名を呼んだ。

「そう、その花嫁は、あたしつつ！」

モンドが話す前にアメジが叫んだ。

「ええっ、アメジ？ おいモンド、マジかよ？」 「あのケツでか女だぞ。」

周りの若者たちが野次を飛ばす。

「うつさいんじゃいつ、カス共！ 前から決まってた事なの！ ね、モンド。」

「い、いやアメジ…、オレの花嫁は…。」アメジから目を逸らしながら、モンドは言った。

「シルバだつつ。」

「…はあつ？」

モンドは隣にシルバという少女を呼んだ。

頬を染め、目を伏せながら少女はモンドの傍へと駆け寄った。えへへと、照れながら寄り添う一人には祝福の声が上がる。

逆にアメジには「バッカじやねーの、こいつ。」「とんだ勘違い女だよ。」

馬鹿にされている。

激しく馬鹿に……。怒りがこみ上げ震えだすアメジ。

「「」「」ぬるよー、アメジ。ぬれたりぬつてたんだけじゃ、タイミングがや。」

いいわけモンド、しかし、今こそ最悪のタイミングではなかろうか。キツとモンドを睨みつけるアメジ。殴られると感じたモンドは反射的に身構えてしまつた。しかし、アメジは鬼の形相のまま、広場から走り去つたのだ。

夢破れし、アメジの思考はぶち壊れていた。

アメジが向かつたのは、街の外の山道。その先には、古代の遺跡の一つ、「水晶神殿」、岩壁を削られ造られてある。

そこには、トパーズと巫女の少女がいた。

「じつしたアメジ、用なら後にしる。」これから【水晶の聖乙女】の儀式をせねば……」

「まつて、ソレ、あたし、やる。」
「ええつ？！」

何があつた、と聞くトパーズには答えず、石の棺へと勝手に入つていぐアメジ。

「立派な聖乙女になります、とモンド」「ぬえてください。」

夢叶わぬこの世に未練などなく、あの世から呪いを放つ道を選んだ。そして、いつのまにか、眠りについていつたのだった、モンドめ、とつぶやきながら……。

あれから何時間眠っていたか、まぶたに光を感じアメジは起こされた。

トパーーズ様？いやちがう。若い男。反射的にアメジは飛び起きた。

「モン…」叫びかけたアメジより早く、その男は語りかけた。

「あなたが、水晶の聖乙女殿。」

「え。」

目の前にいる彼はアメジのまったく知らない男だった。

「だれよ？ あんた…。」

「私はリストルの族長を務める、ジストと申します。」

（なに言つてんの、こいつ、族長はモンドがなつたばっかじや…？）

この出来ごとアメジの樂して生きる夢を遠ざけることとなってしまった。

第2話

「ジストー、もう、止めるたるよー。」

「タル。この石棺で最後だ、もう少し待つてくれ。」

冷たく静かな水晶神殿に、一つの人影と一つの小さな影があつた。

この遺跡には、百年前まで行われていたといつある儀式にその身を捧げた少女たちの亡骸が納められていた。

標高の高い、このリスタルの地の、ここはさらに天に近い場所である為、神殿内に時たま、冷たい風が流れこんでくる。

青年に付き添ってきた小さな生物は風によつて、毛を膨らませられ、寒さに震えていた。

青年は最後の石棺に手をかける。

「どうせまた骨たるよー。もう骸骨はイヤたるー。」

どうやら他の石棺は、すべてこの青年が開けたようだ。石棺の中にいた少女達は、皆骸と化していた。なぜ、彼はこんな事をしているのか…。

「フンッ」青年は石の蓋を持ち上げようと力を籠める。

しかし、いくら大の男であれ、一人で持ち上げられる重さではない。だが、蓋はゆっくりと動きだした。

彼は体内の水晶（このリスタル独自の気の使い方）を自在に操れる

「水晶使い」だった。

手のひらが、ポウと光りながら、さらに力が高まっていく。その数秒後、蓋はみごと外れたのだ。

「ああっ、どーせまた骨骨たるつ。だいたい百年前の人間が生きてるわけないたる。」

「タル…見る…」

「生きてたらそいつバケモンたる。そいつこそ黒水晶たるよつ。」

「タル、生きてるぞ、彼女だ…。ラルド様の言つた通りだ」

「へ、ええつ？」

その石棺の中には、今にも目覚めそうな少女の姿があつた。興奮を抑えながら、青年は少女へと近づく。

「んんっ。」少女の目蓋がぎゅっと動いた。「あつ…」

少女が目を覚まし、彼と目が合つた。

「あなたが水晶の聖乙女殿」

彼はそう語りかけた。わけもわからぬ顔で彼を見返す少女とは対照的に、青年の顔は、輝きに満ちていた。

アメジ、フリーズ状態

大地の底から呪つてやる、と。「水晶の聖乙女」をやるとこいだした自分。

自分をフツたモンドに対して、石棺の中でどかどかと怒つていたのは何時間ほどか…？

気がつきや目の前に見ず知らずの男。しかも、言つてる事意味不明！

とりあえず、深呼吸、でもう一度、男に問いかける。

「で、あんた、誰？」

「ですから私は、現在族長を務める・・・」

「へ？モンド、もう面倒臭くなつて、族長辞めたのか？」

「モンドとは？」

二人の問答をイライラと聞きながらもう一つの口が開いた。

「ジスト、こいつダメっぽいたるよ。きっと、百年も眠つてボケたに決まつてたる。使えないたるよ。」

生意氣に話す小さな生物を見て、アメジは驚いた。

「ブツ、ちょっと、こいつまさか聖獣？」と、なぜかふきだすアメジにジストが「そうだ」と答えた。

「タルは私の良きパートナーです。」

彼らが聖獣と呼ぶその哺乳類は、このリスタルの地に、リスタルの民が移住していくずっと昔から、ここに住んでいた。

彼らは、人と共存する道を選び、言葉を理解し、話せるまでになつた。

彼らも、水晶のチカラをその身に秘めており、ジストのよつな「水晶使い」と組んで、共に過ぐしている。

「あたしが知つてゐる聖獣のプラチナは、もつとスラつとしてて、足も顔もスッキリしてて……」

「プラチナ知つてるたるか？タルのご先祖様たるつ。」

「は？ご先祖？何言つてんの、まだ現役よつ。だいたいアンタみたいなブツサイクな聖獣見たことないわよ。」

「ぶつちーーつ。ブチキレたるーーつ！」

次の瞬間、アメジが激しくブツ飛んだ。タルの飛び蹴りが炸裂したのだ。

「ど」ああーーつ。

変な悲鳴を上げ、凄まじい格好で、アメジはすつ転んだ。

「コラつ、なんてことしてんだ、タルつ。」

ジストがひょいと、タルを抱き上げた。

「だつてー、ジストー、こいつがタルのことバカにしたたるからー。」

「だつてさ、ほんとにブツサイクなんだもん。こんなモチみみたいにぺつたんこな顔でさー。」

アメジが、ムクリと起き上がつた。

「いいか、タル。私達は、聖乙女殿にお力を借りにきたんだぞ。」

「？」（あたしの力を借りに来た？ビーウーーいつちや？）

「うう、でもでも、タルとジストでがんばれば、黒水晶なんて倒せるたるつ。」

「それができないからこーしているんだろ？水晶使いと聖獣だけでは、黒水晶とまともに戦えない。」

「黒水晶……」アメジはその名に聞き覚えがあつた。

（でも、それって確か、あたしが生まれる前に絶滅したって聞いたけど…）

「黒水晶と戦うには、私とタルだけではダメだ。巫女のサポートが必要だらう。」

「巫女ならサファアがいるたるー」

「サファアは、まだ前の戦闘での疲れが癒えてない。今では巫女も彼女一人になってしまったからな。」

黒水晶と戦う？

やっぱリアメジには、この一人の会話は理解不能だつた。

黒水晶は知つてゐる。この田で生きてゐるところは見たことは無いが。

以前アメジの父「オルド」が亡くなつた後、葬式で初めて知り合つたモンドと一緒に、父オルドがよく通つていた山脈にある遺跡をと巡つたりしていた。

その山道の途中、何度か目にした、巨大な生物の化石。

このリスターに、昔からいたといわれ「黒水晶」と呼ばれている。見た目は鳥類のようで、はるか昔に滅んだ恐竜にも似てる。

その体は巨大で3Mから10Mはあるといわれた。さらに、凶暴で人を喰らい、その体内には毒を宿し吐く息だけでも、生物を死に追

いやつたといつ。

全身ドス黒く、田も不気味に黒くギラギラと輝き、大きなその体には、桁外れな水晶を秘めていた。そのことから、人々はその怪物を黒水晶と呼び、恐れたのだ。

しかし、リスターの民は、実に好戦的な民族で、恐れるだけではなく、戦う道を選んだのだった。

その戦いの歴史は、リスターの民がこの地に移住してきた、千年も昔から続いていた。

人は、聖獣と力を合わせ、たくさんの犠牲を出しながらも生きぬいてきたのだ。

その戦いも、アメジが生まれる少し前、アメジの父オルドや、その弟でありモンドの父の二人が中心となり、黒水晶を絶滅させ、長い黒水晶との戦いの歴史に幕を下ろしたのだった。

(やがて、黒水晶つて、とつぐの昔に滅んでんじやん。なのに、こいつらの言つてる事つて…。)

「とりあえず、街に戻つてラルド様に報告しよ。黒水晶がこの辺りに戻つてくるまえに。

さ、聖乙女殿。私と一緒にきてください。詳しくは、向こうでお話します。」

混乱ぎみのアメジに、ジストが優しく手を差し出す。タルはまだ不满げだが。

(よくわかんないけど、こいつが族長ならあたしの夢もまだ、終わっちゃいないよね？

ふふふ、ってかモンドより断然いい男だし。)

怪しい笑みを浮かべるアメジに、タルがピクリと反応する。
アメジは未だ自分が百年先の未来にいる事に気づいてはいなかつた。
そして、この直後に出会い、最悪の出来事にも……。

第3話

「聖乙女殿、足元に気をつけてください」

「おおひ、どうも…」

ジストに導かれ、アメジは水晶神殿を出る。そのジストの隣をブツクサと不満気なタルが歩く。

アメジ、この面倒くさがりな女の瞳は希望に満ちていた。

「夢は終わってないぜっ！」

「え、なにか言いました？」

「ねえ、アンタさ、もしかして結婚してる？」

「え、いいえ。まだですが…」

「よっしゃーーっ！」とアメジがガツツボーズをとった瞬間、タルの飛び蹴りがまたも炸裂した。

「いつてーーっ。またやりやがったなー、モチ聖獣ーっ。」

「お前っ、今ジストのことやらちー目で見てたたるよっ。」

「こんの一ーど、もみ合いそうな一人をジストが止める。

神殿を出てからも、アメジとタルは、フーっと睨み合っていた。

土と石だらけの、このリストアルの山道を下りながら、眼下に映るは、リストアルの街。

世界から隔離されたこの地は、百年の歳月を経ようが、大きく変わることはなく、アメジのいたあの頃と、ほぼ同じに見えた。

そり、遠田からは。この時、アメジは違和感を感じる」とはなかつたが……。

その直後、その気持ちは吹き飛ぶことになる。

「……」

その異常に真っ先に気づいたのはジストだった。

「タルフ！」

自分のパートナーを傍へ呼ぶ。その声にタルも状況を理解し、すぐにジストの傍へと駆けた。
アメジだけはなにも理解しておらず、え？え？となるだけだった。
だが、ただならぬ事態だとすぐにわかった。

まだ日中だというのに、アメジ達の上は真っ黒な影に覆われた。
見上げると、そこには巨大な怪物がアメジ達を見据えていた。

「黒水晶……」

「なつ、なんだーっ？！このバケモンはーっつ！！」

慌てふためくアメジとは対照的に、ジストは冷静にそのバケモノを見ていた。

「思っていたより早く戻ってきたな。」

「案外この女の水晶に呼ばれてやつてきたのかもたるよ。」

(もしかして、これが黒水晶？ええっ、でもなんで？急にこんな
が現れんのさつ？ そしてなんでこいつらは冷静なんだよ？まさか、
ドッキリなのか？)

黒水晶は三人を確認すると巨大な口をさらに広げて、襲いかかつて
きた。

うつそーん。と立ち去っていたアメジはジストに抱きかかえられ、

そこから下二メートルへと飛び降りた。

タルも同時に続く。

その素早い判断と行動で、少し余裕の時間ができた。あっけにとら
れているアメジにジストが訊ねた。

「聖乙女殿、ドクロ水晶は？」

「は？ ドクロ水晶？」

「ジスト、こいつ持つてないたるよ。」

「え…。」

ジストは、本当に持つてないのか訊ねた。

アメジはなにソレ？ とわけのわからない顔をしていた。
本当になにも持つてなかつたのだ。

それを知つたジストはさつきのクールな表情からがっかりした顔にな
つた。タルは「やつぱり」とため息をついた。

「巫女の力無しでは、黒水晶へ攻撃が届かないからな…」
「こいつ巫女のくせに、ドクロ水晶持つて無いなんて、一セモンた
るよつ。」

（なんなのよ、ドクロ水晶つて？

ん…、そういうえば以前、トパーーズ様がちゃんと修行すればそれの扱
い方を教えてくれるつて、見せてもらつたおぼえが…。

そう確か、透明なドクロをかたどつた石で、手のひらに乗るサイズ
の…。

それに水晶をこめるとかなんとか。）
とアメジがのんびり考えてこるうちに、黒水晶は田の前にまでや
ってきた。

「どわわわあーーっ！」 とまたも慌てふためくアメジとは反対に、

ジストとタルはクールでいた。

「しかたない。気をそらすことくらいしかできないが、タル。私たちだけでいくぞ。」

「わかつたる。」

「いいか、タル。今日は戦いをしにきたのではない。聖乙女殿を無事、ラルド様の元までお連れすることだ。」

そう言うと、ジストはアメジに街のほうまで走るようにいった。半分パニクリながらも、アメジは頷いた。

黒水晶はまたも巨大な口を広げながら襲いかかってきた。

アメジは駆け出し、ジストは自らの水晶を高め、それを右手へと集め、激しく輝きだしたその右手に集まつた水晶を、聖獣タルへと向けて放つ。

水晶使いジストの水晶によつて、さらに大きな水晶をその体に宿したタルは、輝く光の生物兵器と化す。

光の兵器となつたタルは光のごときスピードで、空へと駆ける。

そして直線的な動きで黒水晶へと向かつた。

しかし、黒水晶は、それを簡単にかわした。

ジストもタルもそつなることはわかつていた。

聖獣は水晶使いに水晶を注ぎ込まれることにより、戦いの力を得る。それにより強力な光の兵器となるが、その状態の聖獣は、ほとんどの感覚（視覚、聴覚など）を閉じ、攻撃へとまわすため、自分の進む道すらわからなくなり、直線的な動きしかできないのだ。

その上黒水晶は、直線上の動きに強く、その行動を見切られる可能性が非常に高いのだ。

それをサポートできるのが、リストルでは巫女と呼ばれる、女の水晶使いなのだ。

「ひい、ひい……」

アメジはひたすら駆けていた。

とはいえここは山道下り道。おもわず転がりそうになり、アメジは転ぶ直前、下の道まで飛び降りた。
ダメ人間といわれてきたアメジだが、運動神経はなぜかよかつた。

ふう。と一息ついたアメジは上のほうにいるジスト達を見た。

「あいつら、大丈夫なのか？黒水晶と戦うなんて、だいたい滅んだんじやなかつたの？ オヤジ達の代で終わつたつて聞いてたのに。」

黒水晶が絶滅した後、対黒水晶の為の職業だった水晶使いと巫女は、祭りが主な仕事となつていたのだつた。

巫女は踊りを舞い、水晶使いは曲を奏である。

アメジたちが行つていた修行も黒水晶と戦わなければ無意味なもののがほとんどであつたが、それはもう儀式と化していた。

「はあー。とにかく街に戻ないと。トパーズ様ならなにか知つてるかもね。」

アメジは飛び降りながら、山を下り、街をめざしていた。

街を目前にし、あの声が聞こえた。

「聖乙女殿っ。」

ジストとタルが駆けつけた。

あの直後、黒水晶はなにかに呼ばれたよう、「ギヤアアア」と鳴いたかとおもうと、突然羽ばたき、山脈の向こうへと飛んでいった

のだった。

「では、聖乙女殿。」案内します。」

(案内つて、あたしゃここの生まれなんだけど…。しかし、この男バカ丁寧な奴だな。)

「てゆーか、その聖乙女殿でのやめてよね。あたしは……」

(ほんとに望んでなったわけじゃないし、ヤケおこしただけだもん。)

「では、なんとお呼びすれば…？」

「アメジ。アメジでいいわよ。アンタは、ジストていつたつけ？」

「アメジ…」

「そつ…よろしくね、ジスト」

そう言つてジストへと歩み寄るアメジに、「近づくなー」と、タルがどかつとぶつかる。

山道から街へと入る。山岳地帯にあるコスタルは、街も山に沿い、段々状に建物が立ち並ぶ。

ゆえに、街は階段だらけであった。

アメジ達が街へ入ると、たくさんの人が三人を迎えた。
しかもえらい歓迎ぶり、「この方があの……？」と皆珍しそうにアメジを見ていた。

ジストには「族長、おかえりなさい。」の声がかかる。アメジにとつては異常な光景だった。

いつもバカにされてばかりだったアメジにとって、こんな歓迎をうけるのは初めてだったのだ。その時、アメジは少し違和感を感じた。だれ一人として、知った顔がないのだ。あと、街の様子もどこか違う気がした。あとでトパーズ様に会いにいこうなどとアメジが考えていると、人ごみの中からジストの名を呼びながら、アメジと同じ年頃の少女が現れた。彼女はジストの姿を確認すると、うれしそうな表情で彼の傍へと駆け寄った。

「ジスト様っ！」

「サファ」

「サファ」

サファと呼ばれた少女は潤んだ瞳でジストを見上げた。この雰囲気からして、二人は恋仲なのでは、とアメジは悟った。確かにいい男がそうそうフリーではない。

「マジ？」

早くもアメジの夢は崩れ去るのだった。

「ジスト様、おかえりなさい。」

「ああ、サファ。ただいま。」

さわやかに挨拶をかわす男女を隣に、アメジは一人落ち込んでいた。

夢は終わった、と。

「それより、まだ動き回らないほうが多いんじゃないかな？ケガも完治しないだろ？」

「ええ、でも心配だったから…。」

あ、ジスト様、…そちらの方がもしかして…」

とサファはアメジを見た。そしてジストがサファにアメジを紹介する。

「ああ、そなんだ。ラルド様は正しかったよ。
彼女が水晶の聖乙女、アメジ殿だ。」

と、ジストがおおげさに紹介すると、サファはもぢりん、周囲の者たちも「おおっ。」と驚いた。

それに気づいたアメジは「んっ」と少し変な顔をしていた。

「おじい様も喜ぶわ。すぐに知らせましょ。」

とサファが後ろを振り返った瞬間、すさまじい声が響きながら、こっちへと近づいてきた。

その声は人ごみを跳ね除けながら、アメジの目の前で止まった。

「おおおっ。族長、そちらの方が聖乙女殿じゃなあっ。」

その声の主は、つるり、と頭のはげ上がった、歳は七十を迎えたばかりの男であった。

「ええ、ラルド様のおっしゃった通り、水晶神殿に…」

とジストが説明をしているが、その男はほとんどそれを耳に入れておらず、舐めるような目でアメジをジロジロと見ていた。その目線は顔よりも、胸元そして下半身、特に尻をしつゝに見ていた。

「ちよっとー、このジジイだれよつ？」

アメジは露骨に嫌な顔をしながら、一歩後ろへ下がった。

そんなアメジの心中も察せず、ラルドは一タ一タしていた。

「アメジ殿。こちらは大神官のラルド様です。」

「大神官？ なに、このジジイが？」トバーズ様は？ とアメジが問いかける間もなく、ラルドが激しく接近。満面の笑みで迫った。

「おおっ、アメジ殿っ！ いやー、ワシの理想どつづじゃ。」

ワシの理想どつづのいい尻じゅー。

このラルドとの出会いがアメジに激しい戦いの道をもたらすことになるのだった。

「よーし、祭りじゅ、祭りじゅー。早速始めるぞい。」

ラルドが手を叩きながら言つた。周りの者もわー。と盛り上がつた。

「ちょ、ラルド様。祭りつて…」

族長なのに状況をまったく理解していないジストを無視し、ラルドはアメジの手を掴んだ。

「でつ。なにすんじゅいつ、このエロジジイがつつ。」

アメジの拳がラルドの顔にめり込んだ、がラルドはすぐに復活し、またアメジの手を掴むと一直線に駆け出した。

ぎやーーー。と叫ぶアメジの姿が遠くなるのを、ジスト達はため息ながらに見送つた。

ラルドに連れられながらアメジはリスターの街を見た。やはり違和感をおぼえた。

ラルドが向かつた先は、水晶使い達の修行を行う場でもあり、大神官の居住地もある、街の中央にある広場前の寺院であつた。そこは、百年前とほぼ変わらず、屋根からはこのリスターで信仰されている太陽神と、その神の下僕とされる四の精霊が鮮やかに描かれたタンカが掛けられていた。

寺院からは香がただよつてくる。中はただっぴりい中央に太陽神のどでかい像が座っている。アメジにも見覚えのある場所だ。

ただ、あの人がいない……。

「さわー、アメジ殿。中へ……」

「ねえ、トパーズ様はどこよ?」とアメジがキヨロキヨロと見回していた。

「おお、トパーズ殿といえば、アメジ殿の時代の大神官ですね。」

「……。ジイさん。のーみそ大丈夫か?」

「アメジ殿、もしやまだ混乱されどるのかな? ま、無理もないかのう、百年も眠つておつたらの。」

ふいーとため息まじりにラルドが同情した。アメジはまだ気づかない。

「あたし、何日寝てた? 一週間とか? その間にトパーズ様辞めちゃったとか……」

おそるおそるラルドに尋ねた。その問いにラルドは笑顔で答えた。

「アメジ殿、ナイスギャグじゃね。百年ですか。いやー、ワシより
ずっと年上ですわ。」

「…ほんと、大丈夫か、アンタ…」

「アメジ殿、まだ信じられませんかの。ほれ、後ろを！」覗なされ。

ラルドはアメジの後ろの壁を指す。

そこには、歴代大神官の名が記されていた。一番端の新しい所に、
ラルドの名を確認できた。

じゃあ、このジジイが今の大神官？とアメジも信じざるをえなかつ
た。

そして、トバーズの名を探した。ラルドをずっとしかのぼって、そ
の名を見つけた。

(え、どーゆーこと？ なんでこんな前にトバーズ様の名前が？
百年だ？ あたしまつたく老けとらんぞ、あたしが眠つている間な
にがあつたのよ？)

「理解できたかの？ ワシも大神官として、古代の書物やら解読し
ておつてのう。」

アメジ殿のことはこの書に載つておつてのう。」

とラルドが取り出した古びた本をアメジがバツ、と取つた。そこには、水晶の聖乙女のことが記されており、黒水晶からリスターを救
つてくれる救世主となる、などと無責任なことが書かれていた。
せうにアメジが驚いたのは、その著者だった。

「オルド……？」

アメジの父オルドの著。

理解不能だった。アメジが巫女になる前に死んだ父が、アメジが聖
乙女になることなどわかるはずもないのに…と。

「何だー、これ、ビーチーいつかやーへ」

「オルド殿はたしか、アメジ殿のお父上ですな。ちゃんと調べておりますぞ。」

そのオルド著の本にはたしかに、アメジの名が記されていた。水晶の聖乙女になるということも。そして、尻がでかいといひどつでもいいことも書かれていた。

「これはほんとに百年先のリストアル?」

さらに、アメジが百年後に目覚め、黒水晶の脅威にさらされているこの時代の救世主となる、などと恐ろしげなことも書かれていた。

「うそだ。オヤジがあたしが聖乙女になるなんてわかるわけないじやん。オヤジの名を騙つただれかのいやがらせ?

みんなしてあたしをからかい楽しんでる。

「そう普通なら無理な事じや。しかし、アメジ殿だけは百年の時を
越えて現代へとたどり着いた。

そうつまり、アメジ殿には特別な力がある。

このリストを救ひ
救世主なんじやよ

アメジにぶつ飛ばされながらも、ラルドは笑顔でしゃべっていた。
アメジは立ち尽くしながらも冷静に考えてみた。

これが水晶の聖乙女の力？百年の時をも越える、巨大な水晶でも身につけたというのか？

街の姿もあの頃となんだか違う。知った顔が一人としていない。族長も大神官も、モンドとトパーズでなく、ジストとラルド。このじいさんの言つことが眞実ならつじつまがあう。そこでアメジは気づいた。

「じゃー、ジストはモンドの……」

子孫、であることに。

「おおっ、アメジ殿は族長の先祖と顔見知りじゃつたのか。」

「ああ、そうだ。あたしゃーあいつのせいで赤つ恥を——」

忘れかけてた怒りがふつふつとよみがえってきた。

段々と赤くなるアメジの顔もラルドの次の言葉で色がひいた。

「アメジ殿は最後の水晶の聖乙女じやからの。」

「へ？ 最後？」

「おお。長年続いた聖乙女制度もアメジ殿で終わつとるんじや。ト
パーズ殿が廃止したらしいんじや。」

(トパーズ様が……なんで……?)

その真意は今のアメジにはわからなかつた。

「さて、そんな難しい話は後ににおいて、祭りじや、祭り。
アメジ殿を歓迎する祭りを行うんじやよ。」

難しい顔をしたアメジにドカーンとバカ明るくラルドが言つた。ア
メジが来るまでに、祭りの準備は整つていた。

族長がリスター族の長なら、大神官は、水晶使い巫女たちの頂点に
立ち、弟子たちの指導にあたるはもちろん、族長のサポートを務め
たり、水晶の研究や、祭りを仕切るのも重要な仕事である。水晶使
いの長なのだ。

特にこのラルドは、明るい性格も証明するとおり、大の祭り好きな
のだ。おまけにリスターの女好きでもあり、その地位を利用した

セクハラも数しれない。さらに尻フヨチで、尻のでかいアメジはラルドにとって理想そのものであった。今後もこのジジイにアメジは振り回されることになりそうである。

「さて、祭りに行きますぞつ。アメジ殿歓迎の大祭りじゃー。」

「祭りつて…え、ちょっと、あたしは救世主なんか…。」

面倒くさがりアメジ、とても嫌な予感がした…。

「祭じやーーアメジ殿歓迎の大祭じやーー！」
ラルドの大きな声を合図に人々は集まり、日が落ちる頃には祭りの準備は整っていた。

街の中央に位置する寺院前の広場に、リスター中の人たちが集い、にぎやかな祭り独特の空気が漂っていた。

広場中央の祭りの時のみに設置する台を丸く囲むように、楽器を奏でる男達に、その内側で踊る娘達。その他観衆、樂器の音、人々の声、広場は祭りの音でいっぱいになつた。

祭りだ祭りだとはしゃぐラルドとは対照的に、アメジはがっくりとしていた。

（はあ、なんなんだ、このジジイは……それに救世主ってなんなによ？）

はあ？……てかさ、マジでここは百年後なの？

聖乙女の儀式つて……あたしはただムカツキながら眠つていただけなのに。

わけわからんよ、でもたしかに、だれ一人知つたやつがいないし……信じるしかないのか？）

ハナーと深いため息をついて、アメジはめんどくさいうな表情でラルドを見た。逆にラルドは満面の笑みで返してきた。

ラルドがアメジをテント下の席に着かせると、二人のもとにジストがやつてきた。

「ラルド様、なにもこんな時期に祭りなど行わなくとも……」「なにを言つとるんじや族長。こんな時だからこそ祭りをやってみんなの気持ちを高めてやるんじやろうが。ほれ、アンタもさつさと

そこに座りなされ。」

そつぱつジストをアメジの横の席に着かせた。

「わあ、皆の衆アメジ殿のために祭りをおおこに盛り上げよつべ。
わあわあ歌えや飲めや踊れや騒げや、ワハハハハ。」

ラルドの仮団とともにこれらに祭りは盛り上がった。ラルドは大きな声で笑いながら酒を飲み始めた。

「おい、なにしとる！もつと美味しいものを持ってこんかーさや、アメジ殿どんじんいてくだされ。」

うごわりしていたアメジも、田の前に差し出される数々の「」駆走を田にするととたんに嬉々とした顔になった。

「うひょー、いいの？おじしゃー。んじやま、お皿葉にせえていただきます。」

単純アメジ、食事中は悩みなど無れ主義。乙女である」とをされ、飢えた野獸の」とくかつくらつ。

「おおお、こい食いつぶりですなー。わすがアメジ殿、
こい尻をしおるだけあるわ。」

「ぶふおーーー尻は関係ないわっ！」

(なんかわけわかんないけど、すっげ美味しいんですけど、こんな歓迎初めてなんですか？、もしかして族長の妻になれなくても楽できるかも？)

アメジの中に新たな道が見えた気がした。

アメジがメシにかつくらつている最中、演奏の曲調が変わり、踊り子達の舞いががらりと変わった。

観衆の視線があるところに集中した。

「おおつ、始まりますぞ、あやつの舞いが。」

ラルドがそう言つて目線をやつた先にいたのは、神の下僕である精靈の面をつけた、他の踊り子とは違つた衣装を身に纏つた娘だつた。

「…サファ。ケガは大丈夫なのですか？」

その娘がサファだと氣付いたジストは心配げにラルドに訊ねた。

「舞いに支障はなからひ、さあ始まりますぞアメジ殿。」

「ふえ？」

ラルドに言われてアメジは初めて広場中央の舞いの場に目をやつた。精靈に扮したサファは曲にあわせてゆつくりと、中央の舞いの台へと登つていった。

巫女は女の水晶使いでもあり、踊り子の最重要踊り手でもある。巫女であるサファだけが舞うことを許される精靈の舞いは、かすかに体内の水晶を放ちながら舞う特別な踊り。

その踊りの力は、舞いを見るものの気持ちをさらりと高ぶらせる」とができる。

サファの舞いによつて、広場中の人々の気持ちは一体となり、そこはさらに不思議な空氣につつまれていた。

その踊りを見ていて、アメジの中のある感情も高まつていた。

「ふむふむ、さすがはワシの孫じや。今となつてはあの舞いができるのはあやつだけじゃからのひ……」

「ラルド様…」

遠い目をしたラルド、少ししてアメジにこう言つた。

「そうじやー！アメジ殿なら、すばらしい舞いが舞えるに違ひない！アメジ殿、ぜひひとつ舞つてはもらえんかの？」

「えつっ！？」

「ぜひとも頼みますわ、アメジ殿。あやつらにありがたい舞いを見せてやつてくれんかの？！」

「ちよつ・・・ちよつと待つてよ・・・な、なに言い出すんだよ？いきなり・・・」

アメジ焦る、焦るにはわけがある、

つまりアメジは
……。

「まあ、アメジ殿のありがたきまらん舞いを見せてやつてくださいんかのう。」

酒に酔つた赤らんだ顔のまま、ラルドは隣に座るアメジに頬み込む。「ちょ…ちょっと、いきなりなに…」

焦るアメジ。

「おい、聖乙女殿の舞が見られるらしいぞ。」

近くにいたれかがそう言つたのを合図に周りは盛り上がり始める。聖乙女のありがたい舞、だれもが見たい見たいと騒ぎ出した。それそーれと。

ヤバイ、たらりと汗が伝い、さらにも焦るアメジ。

「さあさあ、アメジ殿、見せてくだされ。演奏はアメジ殿に合わせますから。」

「あ・・・あの・・・ちょっと・・・今日は調子が・・・腹が・・・悪いけど少し向ひで休んでくるわ・・・。じや。」

そう言つて、腹をさすりながらアメジは席を立つた。

「な、なんとアメジ殿食べすぎですかな? ややそれは大変じや、ワシが腹をさすつて・・・」

「じゃ、あたしあつちのほうで休んでくるわ、今田はありがとね、ラルドのじいさん。」

アメジはそそくせとその場を去つていった。慌ててアメジの後を追おうとするラルドは、醉いがまわつて席を立とうとすればふらついてしまつた。

「ラルド様、アメジ殿は私が・・・」

ふらつくラルドをジストは席に座らせると、アメジの後を追つた。

「おお、またんか族長、ワシがアメジ殿の尻をさす・・・つひいつく」

アメジが抜けた後も祭りは続き、人々は盛り上がつていた。

「はあ・・・ヤバ・・・踊りなんて、やれるかつての。」

祭りの音から遠ざかつた広場を見下ろせる場の階段の上で、アメジはため息をついた。

「踊りなんて、ぜつて一やらねえ。」

アメジ、踊りを嫌がるにはわけがあった。

巫女は女の水晶使いでありながら、祭りの大事な踊り手でもある職業。

水晶使いの能力と同様に踊りの能力も巫女には必要不可欠なのだ。

しかしアメジは、踊りがまったく苦手だつた。

幼い頃、踊りの下手くそっぷりを周りに笑われていたことがトラウマとなり、それ以来、人前ではなにがなんでもぜつたいて踊らないと誓つたのであつた。

そんなアメジがなぜ巫女になれたかというと……、親のコネというやつである。

父オルドと親交のあつた大神官トパーズは、オルド亡き後はアメジの親代わりと成り、アメジを巫女にしたのだ。

アメジを巫女として鍛えてやるつもりが、アメジのぐうたらぶりは予想以上で、アメジはほとんど巫女の修行をしなかつたのだ。

当然踊りなど、一度も練習しなかつた。

ゆえにアメジは人前では踊らぬと固く誓つているのだった。

「はあ、でもあのジジイしつこそう、カンベンしてほしいよ。」

ふう、ともう一度深いため息をついた後、自分を呼ぶ声に気付いた。

「アメジ殿！」

階段を駆け上つて、ジストがアメジの前に現れた。

「…う・げ」

「お体は、大丈夫ですか？」

「あ、いや、まあ…でも踊りはきついかな？あはは。」

「すみません、みながムリを言って…・・・」

「ははは、いーつことよ。なんせ聖乙女ですから（ちよつと調子ぶつこいてる？あたし）」

アメジの様子を見て一安心したジストは、祭りの光に包まれている広場を見下ろした。

「いつ黒水晶が襲ってくるかわからない、いつ何時も気を抜いてはいけない状態なんです。

ラルド様の祭り好きも考え方なんですが……。

アメジ殿の歓迎は、黒水晶を倒した後でちゃんと行いたいと思っています。」

「へへへ、そう？　ま歓迎会は大歓迎だけどさ。」

ジストの目線は広場を見下ろした後は、空へと向かっていた。黒水晶を常に警戒していた。

「そういえば、祭りで巫女の舞いはひとりだけだったけど、他の人はどうしたわけ？」

祭りの様子をふと思い出して訊ねた。

「・・・巫女は、彼女サファひとりだけなんです。」

「へ？」

「他のものは、みな黒水晶に殺されました。

彼女の姉たちであつた巫女たちも、多くの水晶使いや聖獣も、黒水晶との戦いに敗れて、リスターの民のほとんどが黒水晶に家族を奪われ、深い傷を負つた。……早くやつを倒し、人々を守る。それが族長としての私の使命なんです。」

（黒水晶に、みんな殺された？・・・ずいぶん皆明るいから、そんなかんじ受けなかつたけど、黒水晶つてそんなやばいやつなの？）

「先日唯一の巫女のサファが負傷し、しばらく戦えないと思つていたところ、ラルド様から聖乙女殿のことを聞き、神殿に行つたんです。・・・そして、アメジ殿、あなたは現れた。」

現れたというよりか、正しくはジストによつて起こされたアメジ。

「お願いしますアメジ殿！私たちに力を貸してください。

リスターの人々の希望の光となつていただきたいのです！」

「うえつ？」

アメジに頭を垂れるジストにアメジは少しうまづいた。

それつてつまり、あたしにあの
バケモノと戦えつて言つてるわけ？

黒水晶……。

アメジが幼い頃、父オルドと遺跡を巡つていた頃、土壁に眠る化石
を田にしたことを思い出した。

「うわっ、オヤジ、コレすげーでけーバケモン！」

「ああ、黒水晶だな、こりやいつの時代かな……。しかしこいつも
でけーな。んまあ、俺がやつつけたやつはこの倍だつたけなあ？」
むき出しになつたその化石をさすりながらオルドは言つた。

「ええつ？マジでオヤジこんなバケモノ倒したのか？」

「ああ、マジよ。あのころの俺は、かつこよかつたぜえ。ま今は今
で輝いているがな。

アメジ、お前もめんぐくさがつていねーで、
かつこいい生き様つての見せつけるかつこいい人間になるんだな。
俺を見習つて、な。

「は？なに言つてんだよ？バカオヤジのくせによ！」

「は、なにを言つかバカ娘。黒水晶ひとつも倒してねーガキに俺の
かつこいい生き様を否定する権利はないってのよ。」

「なんだとーーームキー！」

父親とバカみたいな口喧嘩を繰り返しながら、遺跡の中を渡り歩いていたあの幼き日々、アメジは思い出し懐かしく、そして……

「くつそー、やつぱオヤジムカツク！」

「へ？」

「ハン、オヤジにやれてあたしにやれないわけないじゃんよー。黒水晶なんて三秒でやれるってのよ。」

アメジは握りこぶしを天へと突き出した。空の人となつた父オルドにむかつての挑戦状。

「本当にですか？アメジ殿！」

「へ？」

ジストの声で回想シーンからリアルへと引き戻されたアメジ。

「ねえ、もちろん黒水晶倒したら、ちゃんと歓迎会してくれるんでしょ？美味しいものいっぱいくれるんでしょ？アメジ様万歳でしょ？祭つてくれるんでしょ？アメジ伝説轟くんでしょ？」

「え、ええ…、もちろんですよ。」

興奮気味のアメジに少し引くジスト。

(そつかー、なにも族長の妻にこだわることなかつたんじゃない？
楽して生きる道、見つけた！かも)

アメジの返事に喜び、早速ラルグのもとへ報告に向かおうとするジストをアメジは呼び止めた。

「ねえ、ジスト、あなたさ、年はいくつなの？」

階段を七段ほど下ったさきでジストが振り向いた。

「え？… 22になりますが…」

「年上じゃん！ あのさ、そのアメジ殿つていつの止めくんない？あと敬語も。」

あたしかたつくるしこの苦手なんだよね。」

少ししてからジストが答えた。

「そう、ですか・・・なら遠慮なく。

アメジ、ありがとうよろしく頼む。」

「おう、ひとつそよろしくな、ジスト。」

アメジの中で高まっていた感情・・・それは：

救世主になれば、みんなにちやほやされて、楽できんじやん。うふ

ふ。

しかし、アメジ気付いていなかった。その矛盾に・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4310z/>

アメジスト

2011年12月21日21時56分発行